「上手すぎて笑いきれない？」 文豪の滑稽句

川名将義

「俳句はあくまでも余技」と言いながらも、文豪はやはり書く人であり、俳句もプロ裸足であった。中でも芥川龍之介や久保田万太郎などは、しっかりと計算された作りの名句を沢山生み出している。そして滑稽句も…

叩かれて昼の蚊を吐く木魚哉　　夏目漱石

法事か何かで僧侶が木魚を叩きながらお経を上げている。叩くたびに木魚は「ポクポク」と音を吐くついでに、蚊も吐きだしたのである。それを見逃さなかった漱石は、ずいぶんと目が良かったのだと思う。居眠りの出そうな春昼の寺。ただ蚊と言わず、昼の蚊と言ったあたりが、句の滑稽さを引き出している。

月に行く漱石妻を忘れたり　　夏目漱石

文豪漱石はさすが、この時代に月旅行などを、大胆に思い描くとは…、と感心しつつ、同伴すべき妻をつい忘れるとは、なんとも大らかな滑稽句よと、この文章を書くまでは思っていた。ところが文献を調べて見ると、この句は明治三十年の作。句の前書きに「妻を遺して独り肥後に下る」とあるそうで、その頃の漱石の妻は流産をしており、その妻を鎌倉に見舞った帰路の句なのであった。妻を置いて熊本の学校へ単身赴任する心境を、漱石らしい独特の感性で表現したのである。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

青蛙おのれもペンキ塗りたてか　　芥川龍之介

東京で目にしなくなったものの一つに蛙がある。

筆者が子供の頃の昭和二十年代後半には、都内の寺社には蟾蜍が居たし、池や田圃には種々の蛙が居たものである。龍之介が生きた時代には、そこかしこで青蛙を目に出来たであろう。また当時の看板や公園のベンチはみな木製で、ペンキを塗っていた。そこで青蛙の瑞々しい色を見て、お前も公園のベンチのように、ペンキ塗りたてか？と問いかけているあたりが、文豪の感性なのである。

時計屋の時計春の夜どれがほんと　久保田万太郎

絶滅危惧種の一つに、街の時計屋がある。「三丁目の夕日」の昭和時代の商店街には、そこそこ大きな時計屋があった。店先には思い思いに時計が飾られていて、それぞれが違う時間を計時していたものである。いったいどれが現在の正しい時間を計時しているのか、作者ならずとも思わず考えてしまう。春の夜と言ったところに、ゆったりした間延び感が「ほんと？」と言う軽い疑問符と呼応して、滑稽感を醸し出している。

最後に俳句の創始者である正岡子規の著名過ぎる句を。

柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺　　正岡子規

この句の眼目は、あまりのタイミングの良さの滑稽味である。柿をガブリと齧った途端、法隆寺の鐘が鳴ったのだ。実際にはこの鐘は奈良の宿で聞いた東大寺の鐘だが、法隆寺としたのは、子規の演出である。法隆寺としたことで、いかにも奈良らしい雰囲気が、十七文字の中に深く蔵されている。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。